

日露戦争百年の節目に因んで
日本騎兵の戦闘
——乗馬戦か徒歩戦か——

田中 賢一 52期

騎兵の戦闘法には乗馬戦と徒歩戦があるが、当時の用兵家はどうか考えていたのだろうか。

明治31年制定の騎兵操典の乗馬戦の総則には次の通り示されていた。

騎兵ニ於イテハ、攻勢ト防禦トヲ問ハズ唯一ノ戦法ハ白兵ヲ以テ攻勢アルノミトス。密集襲撃ハ最大ノ勇氣ヲ奮ヒ各人皆決心シ突入シ、衝突ノ瞬間ニ於テ敵ヲ圧倒殲滅スルヲ要ス。云々と

そして徒歩戦の総則では、多クノ場合徒歩戦ハ防禦ナリトス。騎兵ハソノ目的ヲ達成スルヲメ、他ニ手段ナキ時ニアラザレバ、徒歩ニテ攻撃スルコトナシ。と言っている。

ところが日露戦争で乗馬戦の戦例は後から述べるが極めて僅少で、騎兵第2旅団の戦闘詳報には次のような所見が付記されている。

——襲撃ハ騎兵唯一ノ攻撃法ニシテ、吾人ハ常ニ各種状況ヲ想定シ、襲撃時期及隊形等ヲ訓練シ、又考究スルニ日モコレ足ラズ、戦場ニ於テハソノ好機ヲ求ムルニ汲々タリシガ、出征以來未ダ一回ダニソノ機ヲ得ズ。という

書出して、広漠たる平野では火力を以て密集襲撃は出来ない」と述べている。日露戦争で乗馬戦の戦例は3件しかない。

曲家店における騎兵第13聯隊

先ず曲家店の戦の全般について述べる。第2軍に属する秋山好古の騎兵第1旅団は、軍が南山を攻撃中背後警戒の任についた。秋山は警戒の任務を捜索によって達成しようとした。本邦騎兵用法論に謳っている通り、これが彼軍の持論だった。しかも、第2軍は旅団を封鎖した後、反転して北上することになっているので、捜索はそのためにも必要だった。

第5師団から歩兵2個中隊の配属を受け、5月29日(明治37年)旅団は三家子屯北方に集結完了し、第13聯隊第1中隊を前衛として北進を開始した。勿論多数の斥候を派遣しているのので、敵の動向は掴んでいる。

百騎ほどの敵と遭遇するが、敵はいち早く退却し、その日は20軒ばかり前進して宿営した。

翌30日、更に北上し12・30ころ王家

屯付近に到着すると、将校斥候が帰って来て、田家屯付近に敵騎兵百が徒歩戦準備中であると報告した。田家屯の後方8軒の得利寺には、更に大きな部隊がいることも判明している。出発にあたり得利寺を前進目標にしていた。

一方ロシア側では南山の戦況が危うくなったので、極東総督アレキセフがクロバトキンに要請し、シベリア第1軍団を得利寺に集結させ、日本軍の背後を衝かせようとした。

秋山は思ったが、それほどの大軍が背後に控えているとは知らなかった。第14聯隊長豊辺大佐に2個中隊と機関砲隊及び歩兵中隊をもつて、田家屯の敵の攻撃を命じた。

註 機関砲とは後の機関銃

鵞を割くに牛刀を用いるようなもので、しばらく射撃を交えるうちに、敵は乗馬して退却を始めた。旅団長は第13聯隊に乗馬追撃を命じ、聯隊は3梯団に分かれて前進を始めた。

2軒ばかり前進し竜王廟南方で、50〜60の敵に追着き第一梯団はこれを襲撃し格闘になった。その時新たな敵約200が第一梯団の左翼に来襲し、第一梯団は苦戦に陥り逐次張家屯西端に向い退却した。第二梯団は張家屯に到着したが小流に阻げられ進出出来ず、第三梯団はそれを迂回して第一梯団の戦闘

加入した。ついで第二梯団も迂回進出して襲撃に加わった。

敵は一斉に反転し、巧みに死傷者を馬上に抱え上げて退却して行った。聯隊は逃げる敵を追って竜王廟台上に進出したが、北側が断崖になっていて通過出来ないのので、下馬して追撃射撃を行うとともに、2個中隊を迂回させ約700米ばかり前進したが、今度は敵歩兵が現れ猛射を加えるので追撃を断念した。

これより先、我が機関砲と歩兵は、火力をもつて乗馬戦を支援しようとしたが、砂塵濛々として上がり、彼我の識別困難で射撃が出来なかった。乗馬戦における彼我の死傷がどれほどか詳らかでない。乗馬戦の前に前衛による徒歩戦があり、更に乗馬戦によって一旦退却した敵が、歩兵を加えて攻撃に転じ、竜王廟の攻防となるが、その一連の戦闘を通じ、我が死傷は78、馬匹41(内失踪21)、露軍の死傷41、馬匹1と記録されている。

この戦闘は騎兵旅団にとって緒戦なので、秋山好古は、ぜがひでも勝たねばならぬと思っていた。騎兵対騎兵の戦闘では敵を圧倒したが、そのあと敵の砲兵に痛めつけられ、我が機関砲の弾薬が底をつき、危険な場面があったが敵が撤退したので危機を脱した。実は日本騎兵の緒戦はこれより前に



定州における近騎の緒戦は徒歩戦だったが、このような錦絵が流布した

あった。乗馬戦ではないがちよつと触れてみる。朝鮮半島を北上した第一軍（G D、2 D、12 D）の先頭を進んだ近衛騎兵聯隊は、3月28日定州に於いて敵の騎兵と衝突した。敵の騎兵は徒歩にて我を迎え撃つたので、わが騎兵は配属歩兵とともに攻撃し撃退した。これが日露戦争の緒戦である。コザツクで有名なロシア騎兵恐れるに足らずという信念を生じ、さらに国内に於いては、茜のスボンに緋のエポレット（肋骨）をつけた我が近衛騎兵が、毛皮帽を被り槍を持った大男を乗馬戦で散々に打ち負かしている錦絵が出廻った。



伊太利の画家の描いた日露騎兵の格闘
(右方に銃を自っては刀は使えない)



曲家店における騎兵第13聯隊の乗馬戦 谷洗馬画

秋水一閃



日本騎兵将校が露西亞の騎兵を斬り落したところ 近騎の将校集会所にあった油絵
露西亞のある騎兵聯隊にこの逆の絵があったという

永沼挺進隊張家窪子の乗馬戦

このことは既に「騎兵挺進隊の踏跡」という題で述べたので、重ねては述べない。日露戦争中の数少ない乗馬戦のうちで、僅か百数十騎で行なったものだが、戦局に至大な影響を与えたことを付記しておく。

七家子における馬男木中隊

三番目の戦例は、騎兵第15聯隊第4中隊の乗馬戦である。これは前二者と異なり搜索隊として行動中の騎兵中隊が、退路を断たれ戦闘を余儀なくされて生起した乗馬戦である。

奉天会戦が終り、満洲軍は概ね鉄嶺東西の線まで主力を進め、次期作戦を準備中の時期であった。騎兵第2旅団は小塔子附近にあつて前方に搜索隊を派遣して、敵状搜索に任じていた。

騎兵第15聯隊第4中隊(中隊長馬男木伊予)の行動を騎兵第2旅団史から引用する。これは当時の小隊長福田宗延の記述である。

遼陽窩棚及羅家船口方面ノ敵情搜索ノ任務ヲ受ケタル当中隊ハ四月三十日小塔子ヲ発シテ四家子ニ到リ前任搜索中隊ト交替シ当夜同地ニ宿営セリ。明クレバ五月一日、中隊ハ戸沢特務曹長ノ率イル半小隊ヲ將校斥候トシテ羅家船口方面ニ、遼陽窩棚ニ通スル本道及西側地区ニ各下士斥候ヲ派遣シ主力ハ前日第三中隊ノ停止シアリシ七家

子に到リ諸情報ノ至ルヲ待テリ。

此日天候ハ晴レタレトモ朝来風強クシテ黄塵ハ高ク天ヲ覆ヒ午前十時ヲ過グル頃ニハ百米以上ノ通視ヲ困難ナラシムル程度トナレリ。

其頃道路上ノ下士斥候ハ二、三十ノ敵騎ヨリ斥迫セラレ中隊ニ合シ中隊ノ一部ハ七家子北端ノ丘阜上ニ徒歩戦ヲ以テ此敵ヲ迎エタリ。敵モ一時ハ徒歩シテ応戦セシガ、間モナク其大部ハ砂塵ノ中ニ影ヲ没セシヲ以テ恐ラク単ニ敵ノ斥候位ナラントテ監視兵ノミヲ駐メテ徒歩部隊ハ戦線ヲ引揚ゲタリ。

然ルニ中隊ノ昼食ヲ終ル頃、七家子西側窩棚ニ通スル道路上ニ停止斥候トシテ警戒ニ任ゼシ中隊軍曹以下數騎ハ、兵力不明ノ敵騎ヨリ斥迫ヲ受ケ歸リ来リテ報告シテ曰ク「兵力ハ判明シ得ザルモ相当ノ大部隊ナルモノノ如ク其側面ニ活動スル散々タル敵騎ノ如キモ頗ル活潑ナル動作ヲナシツツアリ」ト。

蓋シ大胆ナル馬男木中隊長ハ彼我搜索部隊ノ斯ル地域ニ於テ交互ニ錯綜スルハ当然ノコト且ツ該敵ハ多分先刻正面ニ頭ハレシモノノ迂回南進セルモノナラント判断シ格別ノ処置ヲ執ラレザリシガ暫クシテ聯隊ヘ出セシ伝騎ハ七家子南方約百米ノ集団家屋附近ニ敵騎兵六十余停止シアリテ聯隊ニ到ルヲ得ズ仍テ報告ノタメ一先ツ帰還セリ。

是ニ於テカ敵騎ノ數ハ我ト同數ニシ

テ敢テ憂慮スルニ足ラザルモ後方連絡線ヲ断ラレテハ如何ニ情報ヲ収集スルモ之ヲ適時伝達スルニ術ナク又近ク四家子ニハ中隊ノ糧秣竝ニ之ヲ監視部隊ノ残置セルアリ之ヲ要ハシムルハ不可ナリ仍テ先ヅ此敵ヲ撃攘スルニ如カズトシ警戒部隊全部ヲ引キ上ゲテ中隊ノ兵力六十五騎直ニ七家子東側ニ集合シ戸沢小隊ノ残部ヲ滑川軍曹ノ指揮下ニ尖兵トシ中隊ハ第二、第三、第四小隊ノ順序ヲ以テ四騎縦隊ニテ発進セリ。

行クコト約百米集団家屋附近ニハ果シテ敵影ノ点々散在スルヲ見ル中隊ハ戰闘準備ノ隊形トシテ中隊縦隊トナレリ此時右側面ノ丘阜方面ヨリ十數発ノ射撃ヲ受ケシガ中隊ハ意前進ヲ続行シアリシニ集団家屋東南方疎林ノ方面ヨリ中隊ト略々同數ノ敵騎ノ一団我ニ向イ前進スルヲ発見セリ是ニ於テカ直ニ前面横隊ニ展開シ「抜ケ刀」、彼我百米以内ニ於テ駆歩、統一テ喊声勇シク襲撃ニ移レリ、敵影ハ近ヅクニ從イ

明瞭トナリシガ、一列横隊ニテ前進シ来リ五、六十米程前方ニ於テ巧ニ中央ヲ開キテ兩側ニ避ケシニヨリ中隊ハ虚ヲ衝キ兩翼ニアリシ部分ノミ敵ト交叉シテ通過セリ、故ニ中隊全員ハ恐ラク此ノ瞬間戦ニ勝テリトノ快感ヲ味シナランモ、何ゾ知ルラン忽チ西側小山ノ蔭ヨリ跳リ出タル敵騎約二百ハ「ウ

ラー」ノ叫ト共ニ中隊ノ右側背ニ向イ

來襲シ又当面ノ敵騎モ半輪シ来リテ見ル間ニ包圍的斬撃ヲ逞ウセリ。中隊ハ突入時ノ情勢俄ニ廻轉ノ余裕モナク、中隊長ノ附近ニ蟄集シ外側ノ兵ノミ防ギ且走ルノ情況ヲ呈セリ。

斯クテ逐次ニ討タレ且ツ散乱シ而モ不運ニモ退路上小劉家店北方道路ノ東側ニ於テ馬ノ蹄冠ヲ没スル湿地ニ陥リシヲ以テ愈々敵ニ窮迫セラレ此附近ニ於テハ最モ劇シキ乱戦格闘ヲ演出スルニ至レリ。

此頃烈風ハ益々加ハリ砂塵ハ濛々トシテ舞イ揚リ時ニハ數歩先ヲ弁明セザル程ナリシガ近ク眼底ニ映ズル戦況ハ我勇敢ナル將兵ノ頻リニ奮戦格闘スルトハ云ハ皆、騎敵騎ニ四繞サレ其状恰モ群魚ノ、魅ヲ争ウニ彷彿タリ、中ニ一度馬馬セシ者起キ上ル遑モナク忽チ數刃乱撃ノ下ニ落命スル者アリ戦友ノ急ヲ見テ赴カンニモ自身モ亦続イテ群

ガ爾敵ノタメ如何トモスベカラザル有様ニテ此湿地附近ヨリハ中隊全ク散乱退却セリ。漸クニシテ戦禍ノ中ヲ切り抜ケ四家子ニ集リ來ル者當初ハ十騎ヲ出デス應テ左翼ニ展開セシ早川小隊ノ大部ト之ニ收容セラレシモノ及戸沢斥候ノ歸リ合スルアリ(戸沢斥候ハ全然中隊ノ戦闘ヲ知ラズ歸路七家子附近ニ敵大部隊アルヲ見テ之ヲ避ケテ四家子ニ歸リ來

リシナリ)

茲二早川中尉ハ残員ヲ纏メテ中隊任務ノ継続ニ移リシガ敵ハ長駆追求シ来ラズ戰場整理ノ後引揚ゲタリ。

而シテ戦闘ニ於テ名譽ノ戦死ヲ遂ゲラレシモノ中隊長及中村中尉以下二十余名、外ニ負傷シテ捕虜トナリシモノ十数名ナリキ。

相手はミシチエンコの指揮する騎兵部隊であつて、ラワ戦法はコザツク騎兵が好んで用いるところだった。

徒歩戦の戦例

乗馬戦の戦例は3件しかないと云つたが、しからば徒歩戦はと言つと、先にもちよつと触れたが近衛騎兵聯隊の定州における戦闘、これも記述済みだが黒溝台会戦の秋山支隊、曲家店における騎兵第14聯隊のほか奉天会戦前の秋山支隊の大房身の戦闘や本溪湖における騎兵第2旅団の戦闘等がある。それから全部を述べる紙面はないので、一つだけ書述する。

本溪湖における騎兵第二旅団

習志野にある騎兵第2旅団は5月に動員が下令されたが、海上輸送の都合で到着が遅れ遼陽会戦には間に合わなかつた。9月18日第1軍の戦闘序列に入られ、同軍の右翼に位置し搜索警戒に任じていた。旅団長は閑院宮載仁親王だった。

第1軍の右遠く離れて梅沢旅団(後

備近衛混成旅団)が配置されていたが、10月に入ってその中間の本溪湖に敵が攻撃して来た。これが端緒で沙河会戦となるのだが、本溪湖が奪取されると第一軍は右側背から攻撃を受け、重大な事態になる。当時騎兵旅団は灰箒を本拠とし搜索警戒に任じていたが、10月9日橋頭を経て本溪湖に進出し、目下危殆に瀕している同地守備隊の救援を命ぜられた。

灰箒―橋頭―本溪湖は図上距離50軒ばかりであるが、この方面一帯は標高500米内外の山岳地帯で、僅かに小径が通じているにすぎない。繋駕機関砲は行軍難渋し、支那人の人足を備入れ一車に30人ずつで後押しさせ苦心慘愴して追求した。

旅団長が橋頭に到着したのは11日正午過ぎだった。ここは梅沢旅団を支援する兵站基地があり安否を気遣つていたが、敵の攻撃は受けていなかった。兵站司令官鯉登少佐は兵站守備の後備歩兵部隊をもつて約30名の集成大隊を編成し、騎兵旅団に差出した。

その時本溪湖付近の状況は後備歩兵2個大隊の守備隊と、9日に到着した第12師団の歩兵旅団長の指揮する歩兵第14聯隊基幹の部隊が、約1個師団の敵の攻撃を受け、本溪湖東方高地を敵に奪われ危殆に瀕していた。

閑院宮旅団長はこの状況を承知し、

太子河左岸から敵の左側背を衝くべく決心し、12日未明出発、主力をもつて千金嶺を経て腰溝堡に向かつた。山間の道は辛うじて騎兵が通れる小径で、機関砲(実は保式機関銃)はかねて旅団長殿下の發案で駄鞍が試作してあつたので、それによつて携行した。弾薬は通信器の収納箱に入れ駄載した。

また第16聯隊(木多道純大佐)には東方の別路をとり、深く敵の後方に向かわせた。

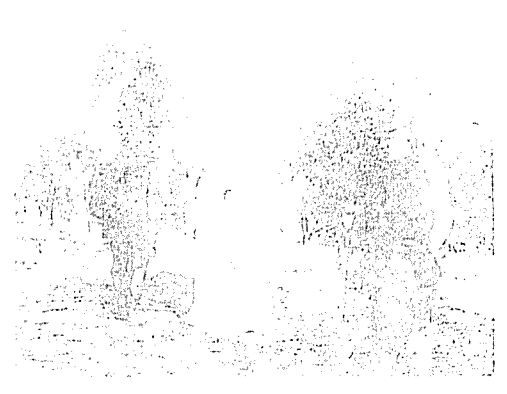
旅団主力は、9時30分平山角(本溪湖南方4軒、太子河左岸)に到着し、進出してきたおおむね同等の敵と徒歩戦をまじえた。敵は砲数門を持つており猛威を振つたが、別路をとらした16聯隊も進出したので、正午頃敵は太子河右岸に撤退した。この戦闘で我が機関砲の活躍は目覚ましいものがあつた。

左岸の敵を撃退した後、対岸の敵に機関砲の猛射を加えたので本溪湖東側の攻防は形勢逆転し、この正面の危機を克服することができた。

この戦闘で旅団は総司令官より感状を授与されたが、偉功を奏した基は、困難な地形を克服し、しかも機関砲まで携行して敵の側背に進出したことにある。

向つて左旅団長宮殿下

右前 稲垣武官
同後 太田豊副官



東海、柏油絵

本溪湖付近戦闘の光景 (10月12日正午頃)

10月16日高官寮に於ける騎兵第2旅団司令部